

人生・人との出会い

若 月 正 吾

本日は、仏教学会のご配慮により、私の教授在任最後の記念講演会を催していただきまして、誠に有難うございます。又、各学部の先生方始め、職員の皆さま、学会の皆さまには、学年末のお忙しいところをお繰り合せご参会いただきまして、心から感謝申し上げます、厚く御礼申し上げます。

私は、昭和二十三年に復員して、その年の十月に駒沢大学に奉職いたしました。この三月で四十年六ヵ月勤めさせていただきますことになるわけでございます。駒沢大学が新制度に変わったのが、昭和二十四年四月ですから、丁度四十年になります。したがって私は新制大学四十年の歴史の中で、人生の半分以上を過ぎさせていただいたことになりました。

私が奉職した当時は、学生数は千人余り、教員は専任、兼任合わせても六十人程度、職員は二十四人でした。今日から見れば驚くほど小じんまりとした大学でございました。その後の大学の充実発展につきましては、逐次お話し申し上げる

ことにいたします。

私の人生七十年の間には、何千人、何万人の人々との出会いがございました。そうした出会いによって今日の私があるのだということは今更の如く感ずる次第でございます。黄龍の慧南和尚は、「孤舟共に渡るすら、尚夙因あり、九夏同居豈に曩分なからんや」と、人々との出会いの因縁を大切にせよと諭しておられます。私共が日々生活していくためには多くの方々とのご縁に因ってささえられるものであります。仏教では衆生の恩と申しますが、私もそのご恩によって今日まで過してきたことを感謝せずにはおられません。

本日は私事に亘って誠に恐縮でございますが、私が今までにお世話になった方々との出会いについて少しく申し述べたいと存じます。

先づ私の生立ちから申しますと、私は子供の頃から病氣や怪我で医者に雇うことが多かったので、当時は医者になりました

いと思っておったわけでごさいますして、従って坊さんになりたいなどは全く考えておりませんでした。したがってお経など習うこともなく、父親が朝課を勤める木魚の音を聞きながら、床の中で心地よく育ったのであります。それが人の体の病気を癒す医者にならずに、心の病を癒す坊さんになってしまいました。これは私の意志ではなく、いつの間にかそうなってしまったのです。

私の生まれた寺は武田信玄公の菩提所である恵林寺から更に五キロ程山合いを登った海拔七百メートルの高台にある山寺で、伽藍だけは大きいのですが半僧半農の生活をしておる寺でした。

父は明治の古叢林でありましたから、日中畑仕事をしてどんなに疲れていても、朝晩の勤行は欠かしたことはありませんでした。貧乏人の子沢山と申しますが男六人・女二人の八人兄弟でした。したがって兄弟喧嘩は大変華やかでした。お蔭で人様に対する痛みを知ることができました。

父は私に僧侶教育をしようとは思っておりませんでした。寺の境内の掃除をしている時など最後のゴミ片付けど、兄弟がお互いになすり合いをしていると、「好事は上座に譲るべし、苦事下座先づ作せ」と云って誠められたわけでごさいます。後になって道元禅師の清規を拝読して「衆寮箴規」に「若し作すべきことあらば、苦事なるは下座先づ作せ、若

し是れ好事ならば、須らく上座に譲るべし、是れ諸仏の正法なり」とあるのを見まして、ああ、この事であったのかと気付いたわけでごさいます。

又、寺では清水を大きな水溜めに溜めて使っておりましたが、その水を使う時に「最後の杓の水は半分だけで元に戻さない」と云われました。その時は何のことだかわかりませんでした。云われた通りに戻しておりました。後になって「典座教訓」に「世尊二十年の遺恩児孫を蓋覆す」とか「大師釈尊猶お二十年の仏寿を分って、末世の吾等を蔭いたもう」と云うお示しを見まして、自分だけが全部使ってしまった。後に後の人々のために残しておくのだ、と云うことが解りました。

大本山永平寺に参りますと、山門入口の大きな石柱に「杓底一残水、汲流千億人」と云う文字が目につきます。私共は平素水の有難さを自覚いたしません。水には水の生命があります。自分たちだけが使えばよいと云うことではなく、児孫のためにその生命を残して置くべきであるという心得を示されたのであります。

話を元に戻しまして、私が高等小学校を卒業した時、父に「東京の昼寝・田舎の勉強と云うことがある、東京に出て見聞を広げなさい」と云われました。東京に出て来ました。そこで落付いたところが芝の青松寺でございました。

当時、青松寺には認可禅林と専門僧堂の修行道場がありました。その年の四月、青松寺では「東京仏教専修学校」を開設しまして、私共小僧は専修学校の生徒になったのです。

僧堂は朝四時に起床して坐禅・朝課・行鉢・作務・講本が日課でした。朝の振鈴が廻って来ますと一旦は起きるので、がまだ子供でしたから眠くてたまりません。また、再び床に潜り込むと、次には侍者が来て布団をめぐってしまふことがしばしばございました。日中は祖録の看読やお経の練習があり、夜は専修学校で英語・数学・国語・漢文・地歴の授業を受けることが日課でした。

堂頭の杉村哲夫老師は、北野元峰禪師の孫弟子でございまして、禪師に見込まれまして、三十四才の若さで江戸三ヶ寺の一つである名刹青松寺を継がれたのでございます。杉村方丈は雲衲の教育に非常に熱心でありました。禅林生の中から行持綿密なる者を何人か宗立世田谷中学に通わせ、又僧堂生は夜間の大学に通うことを奨励しておりました。

昭和七年に北野禪師様が、青松寺にお出になりました折に、私共小僧が禪師様に拝謁してご挨拶申し上げましたところ、九十二才の老禪師様は慈愛に満ちた面持で「お前達若い者は一生懸命勉強しろよ、儂等の若い時はザ香で勉強したものだ」と云って力強くご垂示くださいました。その時のお姿は今も眼前に彷彿として浮んでまいります。

人生・人との出会い（若月） 平成元年十月

北野元峰禪師は、越前大野のご出身で彦根清涼寺の清拙和尚について参禅弁道し、遂に見性悟道の印可を得たのでございます。明治維新の廃仏毀釈の真只中であって、よく大法を挙揚して朝野の名士を説得し、明治仏教界の先鋒として活躍された方でございます。大正九年、一宗の推挙により大本山永平寺の貫首になられ遷化されるまでの十三年間、老骨瓢々として全国に化を布き、その秋霜烈日の気概をもって明治・大正・昭和の三代に亘り宗門の隆昌に尽された近世稀に見る傑僧でございました。

青松寺は都会の僧堂でございましたので、仏教界の碩徳のお話を伺う機会に大変恵まれました。宗乗と申しまして曹洞宗の学問でございまして宗学の講義は後に駒沢大学教授になられた青龍虎法老師、法式は禅門宝鑑を出された来馬琢道老師、仏典講座は禅定家の原田祖岳老師、余乗と申しまして仏教一般の学問は外来の講師で、大正大学教授清水谷恭順先生、東洋大学々長境野黄洋先生、仏教学者の高島米峰先生、加藤咄堂先生、或いは方広寺派管長足利紫山老師など、私共小僧から見ると雲の上のような方々のお話を拝聴することができたのでございます。私の坊さんとしての基礎はこの時代に培われたのであります。

禅僧沢木興道老師が駒沢大学教授になられる以前に「法服格正」或いは「現成公案」の巻の提唱を拝聴いたしました。

沢木老師が初めて青松寺にお出になった時、杉村方丈始め役寮達が玄関に並んで鄭重にお迎えになりました、見ると真黒な顔をした田舎の百姓坊さんという感じでしたので、その時はこの人がそんなにえらい人なのかと思ったこともございました。

杉村方丈は雲衲の教育について三大方針をもっておられました。第一は習字をすること、坊さんは先づ位牌や塔婆が上手に書けなければなりません。第二は説教・講演の練習をすること、布教々化をするためにはお説教が上手でなければいけません。第三はお経の練習であります。字が上手に書け、説教がよくできても、お経が読めなければお坊さんは務まりません。「この三つが出来れば坊さんは何処に行っても恥をかくことはない。」と云ってこれを実行させたのであります。小僧時代には毎日方丈でお経の練習をさせられましたので、お蔭でお経だけは人に褒められるようになりました。けれども習字とお説教は駄目でした。

私が二十二才の頃、時の内大臣木戸公爵家に度々月経に参りました。するといつもご母堂様が玄関で出迎えて下さいました。読経の際には仏間において大臣に向って「幸一お前はそこに座りなさい」と、それぞれご家族の座る場所まで指示されて、ご自分は私の後に座り、一緒にお経を上げられました。そして読経が済みますとご母堂様が直々に茶菓の接待を

して下さいました。それだけではございません、私が帰る時ご母堂様が私にコートを着せ掛けようとなされました。恐縮してご遠慮申し上げたのでございます。二十才を過ぎたばかりの若僧が内大臣のご母堂様に、このようにしていただいて驚きと同時に身の締る思いがいたしました。ご母堂様は帰依三宝のお心でそうなさろうとしたのでございましょうが、修行未熟な私が法衣を着ているお蔭でこのように鄭重なもてなしをして頂だけるわけでございます。法衣をまとう身の有難さを感じた次第でございます。それで私は時折、このことを学生達に話しをいたしまして「君達が檀家に行つて上座に座られるのは、決して自分の力量とは思つてはいかんぞ、それは法衣を纏っているお蔭であることをくれぐれも忘れないように」と、こんな風に申してきました。

次に私の宗学への道を開いて下さった方は、青龍虎法先生でございます。先生は私にとってかけがえのない恩師でございます。

先生は大正九年、台湾仏教中学校教頭を経て、昭和三年、青松寺専門僧堂の単頭職になられました。私が安居したのは昭和六年四月から七年間であります。世田谷中学に通いながら行者をして常に先生の膝下にあつて、先生が日夜「正法眼蔵」の研鑽に精進されているお姿を見て参りました。

先生は研究の合間々々に宗学に対する心得を諭して下さい

ました。しかし当時はよく解らなかつたのでありますが、講習会とか参禅会にお出掛けの時、必ず隨身させていただきまして、次第に宗学に対する関心が深まって参つたのであります。

先生は寺務以外の時間は殆んど机に向つて眼蔵の研究をなさつておられました。或る日、私の同僚が「そんなに机に向つてばかりおつたら苦痛ではありませんか」と尋ねると、先生は「最初は随分努力したが、今はこの時間が一番楽しいんだ」とおっしゃつた言葉は今も心に残っております。私に対して常々「人間は努力によつてのみ報いられるのだよ」と云つておられました。この師の日常の起居が言葉で語られる以上に、私にとってはよい教訓となつたのであります。宗門では師資相承とか、師の煖皮肉とか申しますが、宗学はただ単に知識の伝授のみでは、その真髓は伝承されるものではないことを身をもつて知らされたのであります。

道元禪師に随侍した懷昇禪師は道元禪師の煖皮肉に接し、師の法を一器の水を一器に移すが如く相承して、道元禪師の宗教をことごとく受け継がれたのでございます。「正法眼蔵」は単に文字として懷昇禪師によつて書写されたのではなく、禪師の煖皮肉となつて書写されたのだと思います。道元禪師の眼蔵は即ち懷昇禪師の眼蔵であると云つても過言ではないと思うのであります。

眞の宗学とは、学問の論理性に堪え得ることは当然であります。その上に人と人との煖皮肉の摂理がなかつたならば、宗学は伝承されるものではないと思うのであります。

青龍先生の道元禪師研究の目標は、道元禪師の思想を体系的に組織してその本質を解明することにあります。ここに論文の一部をご紹介しますと、

「禪師の宗教思想は、部分的には幾分組織せられてゐるが、全体的には全く無組織・無統一と云つてよく、一見大小両乗を寄せ集めたる、雑行・雑思想の宗教たる感がないでもない。今その学的組織を持たぬ思想を、大綱的に教行証の三部門の下に、蒐集組織しようと思うのである。(中略)体系的組織と云うのは、全体を有機的に組織せんとするものである。

かゝる有機的組織には、思想全体を統一する統一主体を要するから、先づ禪師の宗教思想の中から、その統一主体を見出し、それを組織の枢軸として、以て各部門との縦の有機的關係を見、更に各部門間の、横の有機的關係をも尋ね、ここに縦横の体系的組織を、試みんとするのである。」

と述べられまして、禪師の宗教は打坐(或は坐禪・或は三昧)中心主義の宗教なりと断定して、研究を進められたのでございます。

先生は不幸にしてその成果の結実を見ずして遷化されたの

であります。宗学研究を志す者にとって誠に遺憾の極みでございませぬ。私は先生のご健在であることに望みを托し、ソ聯より復員したのであります。先生のご遷化を知って本当にガックリいたしました。遂に先生のご研究を継承することが出来なかつたことを今だに残念に思っております。

先生は私に宗学研究の道を開いて下さったばかりではなく、大学進学にも多大の援助をして下さったことは、生涯忘れることのできない大恩であります。昭和六十一年に古稀を記念して「道元禅とその周辺」の小著を出版するに当り第一章に先生の論文三篇を精究して、その思想的背景を考察し、青龍宗学の一端を紹介して法恩の万一に報いんとした次第でございませぬ。

次に立花俊道先生についてであります。先生との出会いは、私が駒沢大学に入学した時からでございます。先生は駒沢大学第十代・第十四代の二度学長をお勤めになりました。先生は原始仏教の研究をされて、大正八年九月から十一年三月まで、オックスフォード大学に留学され、巴利語の学者として世界的権威者でございました。私は第十代学長時代に竹友舎に於て行者を勤めさせていたございました。先生は毎週月・水・金の三日は竹友舎にお泊りになり、朝の勤行には必ず導師をお勤めになる大変行持綿密なお方でございました。また、朝、学長室に行く時には校内

を巡視して校舎の破損した所とか、汚れた所があると一々事務所に連絡して直させたのでございます。自坊に於いても毎日朝課は欠かさずお勤めになりました。寡黙で忍耐強いお方では人には小言をおっしゃったことはございませぬ。自分の腹に納めておられました。気の短い私はしばしば歯痒い思いをすることがありましたが、若き日の私には「無言」が有難い教訓でありました。

先生は自坊の書齋や竹友舎の自室に必ず辞書を置かれまして、意味の解らぬ語句があるとすぐに辞書をお引きになりました。語学者でございませぬから辞書を引くのは当り前位に思っておりますが、或る朝、新聞を読んでおられた時、急に辞書を執られ、新聞の文字の意味を確認しておられました。私はそれを見て驚きました。専門書なら当然のことですが新聞の文字ですら辞書を引かれて確認されたのでございませぬ。

その時、私は「よし、このことは自分も生涯実行しよう。」と心に決めまして、以来辞書を必ず手元に置くことを今日まで守り続けて参りました。無言のご教訓に感謝をいたしております。

次に保坂玉泉先生についてでございますが、お目にかかったのは私が駒沢大学入学の時でございます。試験の面接官が保坂先生でございました。

先生は新潟県のご出身で大正二年、曹洞宗大学（現駒沢大学）を卒業された後、曹洞宗研究生として法隆寺に於て、佐伯定胤師に就て三カ年間唯識の研究をされ、宗門に於ける唯識研究の第一人者でございました。学生時代に成唯識論の講義を受けましたが、その時は恥しながらさっぱり解りませんでした。

又、先生は大変弁説さわやかなお方でございまして、若い頃から布教師としても活躍しておられました。先生は大正七年に山梨の父の寺にも説教にお見えになりました。そのことを申し上げると、先生は古い日記を持ち出されてまして当時を追憶しながら、「あの時は大雪が降っていたので馬に乗せられ、急な峠を越えて途中檀家総代の造り酒屋でおいしいお酒をご馳走になったよ」と、なつかしそうにお話になりました。

私が大学を卒業して世田谷中学に奉職した時の校長は同じく保坂先生でした。その折、先生は「世田谷中学の教員になることは、駒沢大学の教授になる登龍門であるから大変名誉なことだよ、昔の人は皆この道を辿ったのだよ」と、私を激励して下さいました。

先生は時折り職員室に参りまして、軽妙洒脱なお話をなさったり、或いは、職員の質問に対しても仏教を解り易くお話しして下さいましたので、その円満なお人柄は職員から慕われ

ておりました。私が復員した時は、駒沢大学教授に戻っておられました、私を大学図書館にお世話下さいました。

昭和三十三年三月、藤田俊訓先生が学監に就任され、同年八月、保坂先生が総長にご就任になりました。私は教務課長を勤めておりましたので、保坂先生は「世田谷中学のコンビが再び大学でコンビになったね」と、おっしゃって、大変お喜びになっておられました。総長に就任されてからも、お住居が近かった関係もあって公私に亘って昵懇にしていただき父親のような感じがいたしました。先生が私の家の前をお通りになると、当時幼なかつた私の長男がよく「仏さま」と云って側に寄っていききました。すると先生は「まだ仏様ではないよ」と笑いながらおっしゃっていたことを思い出します。

次に山田靈林先生でございしますが私は禅師様と云うより先生と申し上げる方がより親しみを感じるのでございます。先生とは世田谷中学入学以来のご縁でそれは半世紀にも及ぶものでございました。

先生は芝増上寺の塔頭で、新井石禅禅師の後を受け継いで「禅の生活社」の主幹となつて、参禅道場を開き布教に努められる一方、世田谷中学にお勤めになつておられました。その頃「禅の生活社」では月間雑誌「禅の生活」を発行いたしておりました。この月間誌は戦前における最も一般的な禅の雑誌で全国的に広く購読されておりました。先生は永らく世

田谷中学の教頭・校長をお勤めになり、戦後は駒沢大学教授・学監・総長を歴任されたことは皆様ご存知の通りでございます。

私が世田谷中学の三年生の時修身を習いました。先生の授業はじっくりと噛んで含めるような大変印象的な授業振りで、今でも心に残っております。或る時先生は「君達はね、毎日鏡を見なさい、これはオシャレをするためではないよ、自分の顔をよく見つめて常に明るい笑顔を保つように習慣づけることだね。」と云われましたが、後になって仏教の六波羅蜜の一つである布施に顔施のあることを学び、この顔施を実行することを説かれたのだということを知りました。

世田谷中学は宗立でありましたから、校長の安藤文英先生、教授の石附賢道先生始め宗門の高徳の方々に、直接指導して頂く機会を得て幸いでございました。

戦後復員して私自身の心もまだ安定しておりませんでした頃、今の図書館の入口ぐらゐの場所に四誓寮がありました。そこに先生をお尋ねした折に、先生に「意味の解らないお経を読んでも仕方がないではないでしょうか」と、質問すると、先生は「君ねえ、お経は音楽と思えばいいんだよ、音楽と云うものは、意味を考えながら聞くものじゃあない、リズムだよ。」とおっしゃいました。たしかに音楽は人の心を魅了するような音楽でないと、よい音楽とは云えません。お経

も同様に人の心を浄化するような読経でなければ、供養にならないと思いました。

又、その折に先生は約五センチ程の水晶細工の観音像を取り出して「これはねえ、私が岡本かの子女史に上げたものと同じものだが、岡本女史は非常に気性の激しい方であったから腹が立った時には、これを袂の中でギュット握り締めて我慢されたそうさ。それでも納まらない時は床に叩きつけてこらえたそうさ。」このようにお話しになりました、その観音像を私に下さいました。先生は中学時代から私の気性をよくご存知でしたから、「お前、短気を起こすなよ」と誠められたのでございましょう。私に対しては、いつも「君は私の生徒だからね」とやさしくおっしゃって慈しんで下さいました。

先生が永平寺の貫首になられてから、病軀を麻布の別院で静養なさっていた折りに長男を連れてお見舞に上ると、床上に上半身を起されて絡子をお掛けになり、静かに合掌して私の拝問にお答え下さいました。そして長男正俊に「大きくなったね」と云いながら私に「あなたも随分苦勞されたね、元気で頑張ってください。」と慈愛のこもったお言葉をいただいた時は、胸の詰る思いがいたしました。先生とはこれが最後のお別れになってしまいました。先生のお人柄は私の人生に於ける鏡でございました。

話はさかのぼりますが、昭和十七年に大学を卒業して世田谷中学に奉職し、翌十八年九月臨時召集を受けましたが、入隊当初はこれで自分の前途の希望は、完全に断たれてしまったという絶望感におそわれて、ベッドの中で幾度か涙を流したことがあります。しかしそんな私の気持には係わりなく北満の第四軍司令部に配属されたのであります。私達召集兵は将校の当番要員でした。大学出身者は私一人でしたから最初高級副官部に配属され、更に参謀部の暗号要員に廻されたのであります。

参謀部には大野克一参謀や、弟の広道と同期の輿石中尉がおりました。たまたま高級副官が死亡された時に、参謀から「お前は坊さんだからお通夜の読経をせよ」と命ぜられて、二等兵の私が将官や参謀将校の居並ぶ前で読経することになりました。最初は胸がドキドキしておりましたが読経を始めて、自分でも驚くほど落ち着いて参りまして、無事通夜を勤めることができました。この事が縁で大野参謀には格別に目をかけていただき、巡り合いのきっかけになったのであります。

私は徴兵検査で丙種合格・第二国民兵でしたから、大学では軍隊に関係ないと云って教練はさぼってばかりおりました。その私が幹部候補生となり、暗号将校になったのですから戦友に「私のような者が将校では日本は負けるよ」と、笑

いながら話したこともありました。

大野参謀は親分肌の太っ腹で大変面倒見の良い方でした。昭和二十年六月に関東軍司令部に呼んでいただきまして、それからソ聯での三年間の抑留生活を共に過して、二十三年六月に復員したのですが、私が生きて日本に帰えることができたのはお坊さんであったことと、大野参謀に巡り合ったお蔭でございます。

抑留中にはよい経験をしました。それは終戦になって参謀や部隊長、高級将校もすべて階級章をはづして、皆が平等の立場に立った時、人間の真の姿を赤裸々に見せつけられたこととでありました。その端的な例は食事に対する人間の欲心の醜さでした。配分される黒パンの大小やスープの濃淡についてまで云い争う有様でした。仏教では財色食名睡の五欲の心は怨賊大火よりも甚し、心を制し折伏せよと諭しておりますが、時には自分の心を鏡に映して反省せよと云うことでしょうか。

話は変りまして、私は復員して大学の図書館に奉職し再び研究生生活の第一歩を踏み出したことを嬉しく思いました。そして応召・抑留中の空白を取り戻すべき絶好のチャンスだと思つて、手当り次第宗学関係の著書や論文をむさぼり読んで、学究の道に復帰することを願つたのであります。しかしながら当時の駒沢大学は、新制大学への切替えに直面して教

務のスタッフの充実が急務でありました。時の教務学監の児玉達童先生の再三に亘る懇請もだしたが多く、止むを得ず教務課に移ったのであります。事情あつて教務には課長と女子職員一人しかおりませんでした。その時の課長が堀口義一先生でした。

堀口義一先生の学生時代は、大正デモクラシーの華やかな時代でありましたから、先生も多分にその影響を受けたのでありましょうか、文学に魅せられて大学卒業後一日宗務院に勤められました。やがて文学界に身を転じ「代々木書院」という出版社を設立して、小泉八雲全集を始め修証義の解説、行持叢書、永平清規など各種の宗門関係の書籍を発行なされました。

先生は戦後昭和二十三年に岡田宜法総長の懇請により教務課長に就任されたのであります。就任早々に新制大学設置と云う大仕事を担当され、その企画性豊かな手腕を大いに発揮されたのであります。私が先生の下で教務主任になったのはその時でした。教務課の仕事は新制度への切替で全てが新しい事柄ばかりでしたから、先生は自ら計画立案なさったのであります。

先生はこうした間にも、宗門の布教教化事業にも参画されました。「曹洞宗通信構座」の発刊を企画され、又、宗教総長佐々木泰翁師に宗学研究機関の必要性を説いて、今日の「宗

学研究所」を誕生させたのであります。当時の大学には研究機関としては名前だけの「禅文化研究所」がただ一つあっただけでした。先生の企画性に富んだ大らかなお人柄の下で私は存分に仕事をさせていただきました。

戦後物資不足の折、紙は貴重な時代でした。その頃の印刷は騰写板の手作業でありましたから、印刷の際に二、三枚はいつも試し刷りをいたしました。或る時、職員が試し刷りに白紙を使ったのを見て、先生はそっと私に「自分の物だったらああはしないだろうね。」とおっしゃいました。私はハツトして自分のことを云われたように感じたのであります。誰しも自分の物は大事に使うけれども、公の物に対しては割合関心が薄いものであります。

一枚の紙にも生命があります、それを反故にすることは紙の生命を断つことになり、仏教で云う殺生戒を犯すことになり、古人の垂語に「一粒米の重きこと須弥山の如し」とありますが、一粒米によって仏の種子を長養する功德がある故、一粒米と云えどもその生命を大事にせよと先聖は誠めております。私共は口で説くことは容易であります、いざ実行となると中々容易なことではありません。先生は出版に携さわっていましたが、紙に対する関心は人一倍であつたでしょうが、何事によらず平素そうした細やかな心くばりをもって仕事をなさっておられました。

教務課に移った私は、新制大学のアウトラインすら解らぬまま新学年度を迎えるはめになりましたので、講座の組織とか単位制度の勉強をしなければなりませんでした。更に新制大学は第二学年次から開設されましたので、入学生の受け入れと同時に、在学生の新制への移行措置・単位の切替認定・履修方法の策定など仕事は山積しておりました。

一方、商経学部は三月二十五日になってようやく認可されたので、四月に入ってから度々入学試験が行なわれまして、あたかも盆と正月を同時に迎えたような忙がしきでした。二十五年には短期大学の設置、続いて大学院修士課程の設置などで、到底私の研究活動を続ける状態ではありませんでした。先生はそのことを察していつも温かく見守って下さいました。誠に有難い巡り合せでございました。

昭和三十三年三月、藤田俊訓先生が学監（後の副学長）に就任されました、それからの駒沢大学の発展は目を見張るものがありました。藤田俊訓先生との出会いは、私が世田谷中学で教鞭を執っていた時に教頭として赴任されてからであります。私が応召した後に、ご家族が弟の住職地である葦崎に疎開されて、先生はお独りで賢崇寺に残っておられました。戦局が日々悪化して東京はしばしば空襲されるようになったので、家財を疎開するために私の弟芳一がお手伝いして新橋駅に運んだ翌日、東京大空襲がありましたして賢崇寺は全焼して

しまったのです。その晩から先生は弟と共に広川弘禪氏の宅に三晩泊めていただいたそうです。そのことがご縁で私が復員した時、東京転入が困難でありましたため、暫くの間、賢崇寺に籍を置かせていただいたのであります。

先生のお人柄は元宗務総長田辺哲崖老師の藤田先生追憶の言葉に

「先生はそのお名前の通り、俊敏な資質に恵まれ理論家で、わけでも頑固無類と云っていいほど粘り強く、それぞれ相俟って事として成らざるなしの観があった。駒沢大学が今日まで拡充発展を遂げたのは、かかって先生の手腕と熱意に負うところの如何に大であったか。駒沢大学の北海道進出にひたむきな情熱を傾けられたことなど、他人の追隨を許さね先覚者のセンスの鋭さをそなえていた。世の毀誉褒貶を意に介せず、是と信ずるところへは捨身の精進の駒を進められる先生に対しては、立場や信条の相違を越えて誰しも敬意を払うことを惜まなかった。又人情味極めて厚く特に後輩のためには親身になってよく面倒を見ておられた。そうした先生の庇護の下に世の中に出た人の尠くないことを知っている」

と述べられておりますが、先生のお人柄を語って余すところがありません。

藤田先生が学監に就任された頃の駒沢大学は、財政的には非常に苦しくて俸給は非常に安かったので教職員は不平たら

たらでした。銀行は金を貸してくれませんが、必要経費の支払いも滞りがちになり、先生はこのままでは大学は潰れる外はないと心配されて、連合教授会（現全学教授会）において「ヌル風呂談議」をなされました。そしてヌル風呂大学の釜焚きをしようと決心されました。先生方に皆さんもこのヌル風呂を温かくするために、薪一杓でも運んで下さいと頼んだエピソードが思い出されます。

在職十七年間に、法学部・経営学部・大学院各課程を始め、北海道に進出して教養部、さらに岩見沢、苫小牧に二大・二高校の創設をなし遂げられ、施設に関しては、体育館・図書館・禅研究館・玉川校舎・学生寮・学生会館その他の建物を建て、更に祖師谷グラウンド・玉川グラウンド・厚木グラウンド等の校地の拡張など、駒沢大学が飛躍的發展を遂げたことは、まさに先生の経営的手腕に依るところ大でありましてこれは皆さまもご存知の通りでございます。

偉大なる先生の下でお手伝いさせていただいた私にとりましては、数えきれない程のご教訓を賜わり、いつも反省の繰返しをいたしておりました。今もなお先生のご鴻恩に心から感謝いたしておる次第でございます。

先生は大変な論客で一度云い出したら自説を曲げないことには定評がありました。私などしばしば意見の衝突を起して議論し合ったために、はた目には藤田学監と若月とは仲が悪

いと噂されたこともありましたが、しかし先生はこちらの心底を先刻承知しておられて議論の終わった後は、まさしく台風一過、さらりとしておられました。先生は「お前と議論して、私が勝った時は私の負けだ。お前が勝った時はお前の負けだ」とおっしゃっておりました。

先生が晩年ご自身の健康をも顧みず力を尽されたのは、新玉川線「駒沢大学前」駅の誘置運動でございました。その頃先生は健康を害されて入院を繰り返す状態でございました。しかし大事な交渉には病院から私共の肩につかまりながら出掛けることが度々ありました。二カ年に亘る東急との交渉の結果誕生したのが新玉川線「駒沢大学」駅であります。これは先生の最後のお仕事でした。先生は「この勝負は駒沢の勝だ、百年先までの広告料を考えれば駒沢大学の宣伝価値は計り知れない。」と申されて大変喜んでおられました。

私は、岡田宜法先生・衛藤即応先生・保坂玉泉先生・山田霊林先生・榎林皓堂先生の五代に亘る総長の下で、教務を担当させていただきました。

この二十年間に学生数は次第に増加し千人余りから二十万人を超えるようになりました。教務部の職員も六・七人から三十人程に増員されましたが、しかし教員や学生数の増加に比してまだまだ人手不足の時代でございました。しかし今日のようにコンピューターやファックスもございません、全て手

作業でしたから、試験問題もガリバンで切り、輪転機で印刷するという状態でした。その上、学部・学科・大学院課程などの増設が毎年如く行なわれましたので、教務の職員は残業はもとより休暇も返上して事務処理に追われている有様でした。しかし誰一人不平不満を云うこともなく、お互いに援け合って事務に停滞のないように部員一同努力を重ねて下さいました。私はこうした部員のご協力のお蔭で教務部長としての職責を果すことができましたのであります。この苦勞を共にした人達が現在大学事務局の幹部として活躍されていることは力強い限りでありまして、私のもっとも嬉しいことだと思います。当時を振り返ってみてよい仲間巡り合ったことを感謝し、今でも心の中で手を合わせておる次第でございます。

最後になりましたが学部等の設置に当り格段のご尽力ご指導を賜った方々がございます。当時は教員組織・建物・施設・図書など全ての面において不足・不備の時代でしたから、認可条件を整えるのに大変苦心いたしました。学内の主な協力者は笠森伝繁先生・森凱雄先生始め設置に携わった事務局の方々でございました。学外では大学設置審議会委員の慶応義塾大学塾長の高村象平先生、明治大学総長の佐々木吉郎先生（後に駒沢大学経営学部長）、北海道大学々長の杉野目浩先生、井上修次教授及び文部省の事務官露木恵一先生な

どに温たかいご指導とご助言をいただき、認可の運びになったことを深く感謝すると共に有難い出会いであったことを幸に思っております。

在職四十年を回顧して、歴代の総長に仕え沢山の教職員の方々の恩情に包まれて過ぎてきた歳月が、大変懐かしくそして有難く感謝の念で一杯でございます。時には批判の矢面に立たされたこともありましたがこれは私の不徳の致すところでありました。

私のこれまでの人生は沢山の宗門の碩徳に出会って有難い教訓を賜わり、又、駒沢大学の教職員の方々の温情溢れる庇護を蒙り、大学の一員として四十年間を過ぎさせていただきました。このことは生涯忘れ得ぬ幸せでございます。ここに深く感謝申し上げる次第でございます。

この三月をもって定年退任するに当り皆様方の今日までのご芳情を心から厚くお礼申し上げますと共に、駒沢大学の益々の隆昌と、皆様の一層のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。本日はお忙しい中をお繰り合せ下さいます、このように

大勢の皆様方が私のつたない話をご静聴下さいまして誠に有難うございました。では皆様ご機嫌よう。

（平成元年一月三十日）

（退任記念講演・駒沢大学中央講堂）